

[創立60周年]  
since 1962

# 東京バッハ合唱団 月報

[第725号] 2022年11月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.725

November 2022

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 大村恵美子先生の『宗教の時間』（NHKラジオ番組）

鈴木 健次（大正大学名誉教授、NHK委託ディレクター）

東京バッハ合唱団創立60周年を記念し、これまでの様々なエピソードを通してバッハと大村先生の信仰が滲み出るような『宗教の時間』を制作したい、と出演をお願いした。実は45周年の時にも『ラジオ深夜便・こころの時代』という番組で2回にわたってインタビューさせていただいたことがある。今回さらに打ち合わせを重ね、台本としてかなり詳細な想定問答を書いて、あらかじめ先生にお送りしたところ、いろいろ書き込みをされた台本が送り返されてきた。それで私としては、もう番組は出来上がっているような余裕たっぷりの気分になっていたので、「台本があると、棒読みみたいに話される方もあるので、想定問答にはこだわらず、自由にお話してください」などと言いながらスタジオ入りした。

ところが！である。

まず私が、60周年記念公演を達成された感懐は？とお聞きすると、大村先生の答えは、こうである。「私は、これをしたからよかったとか、うまくいかなかったからどうだとか、あまりこだわらない。まあ、とにかくひとつ終わった、次は……と淡々とやってきただけ。」

予定稿では、3年続きのコロナ禍の下で記念公演が成功した喜びを語ってくださることになっていた。私は「でも、このコロナ猖獗の中で記念公演が成功したことは……」と食い下がってみたが、結果は思わしくない。「成功したって言っても、キャンセルになった公演があちこちであったし……。いろいろ面白いトピックがあるんじゃないか、うまくいかなかったこともあるんじゃないかとお聞きになりたいんですけど、私はこだわらない人なの。みんなで歌って、楽しかったねって続けていたら、気がつくとも60年経っていただけ。合唱が上手くなっているだろうとか、いつまで続けようとか、考えたり反省したりしない女なんですよ。」

これでは離陸早々から乱高下する飛行機に搭乗したようなものだ。目的地に着地できるか不安になり、しばし絶句してしまった。先生も沈黙が続く。仕方な

いので、とりあえず教会カンタータを日本語で歌うというバッハ合唱団最大の特色について、先生の持説を拝聴することにした。

「私から言うと、ドイツ語なんか分らずに聴いている人が、よく退屈しないでいられるなと思うくらいで、歌っている歌の意味が分らずじまいで終わるなんて、考えられないですね。それなのに、日本人同士の間でもドイツ語で歌う。不思議だなあと思うんです。」

ようやく予定の航路に入ってきた。私は、「ただ日本語に訳すというだけでなく、曲にあわせて歌える日本語にするのはたいへんでしょうね？」と質問を続ける。



■紅葉と晩秋の空（写真：千葉光雄・団員）

「そうですよ、ドイツ語は〈私は〉とか〈貴方に〉とか、とても語数が多いけれど、日本語では、とてもそんなに言葉が入らない。音楽をこわさないで、美しくて簡潔な日本語で喜んで歌えるように、自分で納得できるまで考えるんです。分りやすいということでは口語訳がいいけれども、語彙が少なすぎるでしょう。歌詞の情調も伝わりにくいので

で文語体で訳しています。若い人も、文語でもドイツ語よりは分りやすいと思う。お客さんにこう言われることがあるんです——“曲のタイトルしか分らないと思っていたのに、何でこんなに意味が分るのかと思ったら、日本語で歌ってたのね。これならまた聴きに來ます”なんて。私にはいちばんうれしいことです。」

これで番組の4分の1ほどの話は聞き出せたかな、と思った。ちょっと安心して話題を次に進め、アマチュア団員をも受け入れるというバッハ合唱団第2の特徴についてお聞きした。先生はフランス留学時代を回想し、独仏国境の町、ストラスブールの教会合唱団に参加して、大勢の一般市民が礼拝でカンタータを歌う

### 月報2022年11月号 CONTENTS

- ・心境二題：イルゼの励まし、他（大村恵美子）…p.2
- ・バッハ・カンタータの場面(No.13)、第22番など…p.3
- ・連載：退屈するのはいそがしい[21]（大野博人）…p.4

のに惹かれ、日本でもこれをやりたいと思ったのがバッハ合唱団創設の原点だと、快調にお話が続く。「バッハが好きでバッハ合唱団に入ってきた人なら、頭や声が良くても悪くても、声楽のことを知っていようといまいと、どんな人でも受け入れる」と言われる。

「いろいろな人が集まれば、とかく人間関係のトラブルが起こるのでは？」と私が聞くと、「合唱団であろうと教会であろうと、人間の集まるところに厄介はつきもの。そんなことで躓いていたら、何も出来ない。私は好きな音楽をやってるんだから、一緒に歌ってくださる方があれば幸せです」という答えだった。

しかし 60 年間、幸せばかり続いてきたはずはないと思う。実際、インタビューの中でも、大村先生は、団員がコソコソと他の団員を引き抜いて、自分の合唱団をつくったことが 2 度あった、と繰り返し話された。相当傷つかれたに違いない。しかし先生はこう続けた。「まあ、それはそれでいいでしょう、バッハを歌う合唱団が増えれば。」

この辺で私としては、音楽番組ではなく『宗教の時間』だから、そろそろそれらしい話をしてほしくなり「大村さんは人間関係のトラブルに振り回されず、バッハを通して直接、神と向き合っただけでいいんじゃないか」と誘い水のような質問をした。ところが、これは逆効果だった。

「私は神様だの宗教だのといっても、どういう範囲が宗教で、どういう範囲が宗教でないのかわからないから、あんまり神様の話はしないの。」

これでは『宗教の時間』にならない！と慌てた。しかし一瞬おいて、先生はこう続けた。「あんまり神様の話はしないけれど、とにかくこうして生かしていただいでいて、みんなどうまくいってれば、人生は楽しい。それだけでいい。そういう人生の伴奏として伴走してくれるのがバッハのカンタータだから。人生、生きているうちにいろんな人と出会って、いろんな曲を歌って楽しめば、それこそ天国ではないですか。」

大村先生は陰口を言われたり裏切られても、暗い気持ちになることはない、とおっしゃる。しかし、そんな人間はいないはずだ。たとえ傷ついても、事態を前向きに受け止めようと努めて、合唱団 60 年の歴史を築いてこられたのだと思う。90 歳代に入られた今では、そうしたプラス思考が習性になって、健康に恵まれ、自分についてきてくれる団員に囲まれてバッハが歌える毎日を、本当にご自身がおっしゃったように、感謝、感謝で暮らしているという信仰あつての生活なのではないだろうか。そんなことを言えば、また大村先生にはぐらかされるかもしれない、とは思いますが。

■大村恵美子インタビュー『バッハのカンタータと 60 年』  
10月23日(8:30)放送、30日(18:30)再放送(各30分)。  
NHKラジオ第2放送「宗教の時間」【放送終了。ただしNHKラジオ“らじる・らじる”などのアプリでいつでも聴取可！】

◆月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。  
[http://bachchor-tokyo.jp/monthly\\_newsletter/index.htm](http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm)

## 心境二題

大村 恵美子 (主宰者)

### ●イルゼ・キーゼヴェッターの励まし

皆さま、「月報をいつも楽しんで読んでます……、これからも発行、お願いしますね」と、最近も中学生の読者の方からお声かけをいただいて、私は感動しています。

一方、留学時代によく付き合ってくれた、私よりずっと年下の、女学生(フランス人)が、ストラスブールの住居近くにいました。今はもうヨーロッパを離れてから、段々と通信も遠ざかり、昔の思い出となってしまいました。

それなのに、私は今でも、自分の意見を伝えたく思う文章を書くとき、いつも「そうそう、イルゼね」と気づいて、書き始めます。その年下の友人の名がイルゼ・キーゼヴェッターなので、彼女の習慣として、慎重な顔で、ゆっくりと丁寧に、字を手書きにする、その様子を思い出すのです。いろいろな家事で、急ぐのに字を書かねばならないとき、「そうそう、“イルゼ”“イルゼ”」と、おまじないのように、私は自分に言いかけさせて、あえてゆっくりと書くのです。イルゼは、このように、今でも私を見守ってくれる友人なのです。

### ●逞しい外国作家の小説本を読むとき

たとえば、今は、珍しくゲーテの『詩と真実』をとり出して読んでいるところですが、昔から、慣習その他、生活のすべてがそれぞれに違う作家たちの本を読むときには、日本語訳にたよるしかないのですけれど、その場合、地名や人名に、長い長い例がよく出て来て、そこにわずらわされて「誰がどこで何をすっていうのか、わからなくなるじゃないの」とぼやくのです。

ゲーテのこの本の人名例でいうと、

「ヨハン・ヴォルフガング・テクストル」

「フェルディナント・フォン・ブラウンシュヴァイク」など。

その上、点眼鏡で見つめないと、「R」か「O」か(バ?パ?) 区別できなかつたり、男性か女性か覚えられなかつたり、おかげで出来ごとの筋道を忘れてしまつたりする――。

作家にはエネルギーが途方もなく強い人が多く、主要人物が、太郎・花子とは限らず、複数でこんがらがつたり、それをとりまく群衆も何かと入りまじつたり……。よくあんなに創意をこらせると驚くほど、作家というのは、ものすごい過剰エネルギーの持ち主なんでしょうね。それを読み遂げる方の大変さを物ともせず、尤もらしい解説を書きとげる解説者もさすがです。一冊の本に対するジグザグな物差ししかない自分にとって、だんだん外国作家や長編小説などは、読むか読まぬか、大問題になりつつあります。

## バッハ・カンタータの場景 №13

大村 健二 (団員)

次回、第122回定期演奏会(2023年5月6日、川口リア音楽ホール)の演目(下記)を、「昇天祭への道程——受難と復活の予告から、天への別れまで」と仮にまとめてみて、前号から紹介を始めています。ステージでの演奏順は以下のとおり。

- ・カンタータ第12番《泣き 歎き 憂い 迷い》BWV 12
- ・カンタータ第22番《イエス 十二弟子呼びて言いたもう》BWV 22
- ・昇天節オラトリオ《頌めよ 神のみ国》BWV 11

前号では、この3曲が選曲された経緯から、作品の物語的な時間軸に沿った位置づけ、成立事情の多様さなどに触れながら、1曲目のカンタータ第12番の概要にまで触れました。興味のある方は読み返してみてください。以下、2曲目の内容に注目してみます。

### ■カンタータ第22番《イエス 十二弟子呼びて言いたもう》

Jesus nahm zu sich die Zwölfe BWV 22

|   |  |                         |
|---|--|-------------------------|
| [教会暦] 復活節前第7日曜日 [Estomihi] (他に BWV 23、127、159)  |  |                         |
| [使徒書] I コリ 13、1-13 (信仰、希望、愛のなかで最も大なるものは、愛である)   |  |                         |
| [福音書] ルカ 18、31-43 (死と復活の予告。エリコ途上で盲人を癒す)   |  |                         |
| [成立] 初演 1723年2月7日 (上記教会暦、トーマス・カントル採用試験)、ライブツィヒ (再演 1724年2月20日)  |  |                         |
| [歌詞] 歌詞作者不詳。1) ルカ 18: 31 および 34 (同)。5) エリーザベト・クロイツィガー「キリスト 神のひとり子」(1524) Elisabeth Kreuziger „Herr Christ, der einge Gottessohn“ [BCH 49]、第5節 |  |                         |
| [上演用訳詞] 大村恵美子 <a href="http://bachmusik.starfree.jp/bwv022.htm">http://bachmusik.starfree.jp/bwv022.htm</a>                                   |  |                         |
| [編成] 独唱 ATB、合唱、オーボエ、弦合奏、通奏低音  |  |                         |
| [楽曲構成]  |  |                         |
|   | 訳詞冒頭句/原詞冒頭句  | 編成(略語)/調                |
| 1. アリオゾ(T/B)と合唱   | Jesus nahm zu sich die Zwölfe und sprach: イエス 十二弟子呼びて 言いたもう  | ob, str, bc<br>ト短調 4/4  |
| 2. アリア(A)   | Mein Jesu, ziehe mich nach dir<br>わがイエス、み後に われ従いて            | ob, bc<br>9/8           |
| 3. レチタティーヴォ(B)  | Mein Jesu, ziehe mich, so werd ich laufen<br>イエスよ 引きゆけ、われ従わん | str, bc                 |
| 4. アリア(T)   | Mein alles in allem, mein ewiges Gut<br>とわの わが尊き主            | str, bc<br>変口長調 3/8     |
| 5. コラール   | Ertöt uns durch dein Güte<br>我ら 死にては 恵みに生く                   | ob, str, bc<br>変口長調 4/4 |
| (演奏時間 18分)  |  |                         |
| [上演履歴] 1985 (#58)、2023 (#122) 予定  |  |                         |
| [日本語楽譜発行] 2022年、ISBN 978-4-925234-89-4 (¥1500)  |  |                         |

曲は、オーボエと弦合奏による短い序奏で開幕します。重い使命を果たすためのエルサレムへの旅立ちを弟子たちに明かす日が、ついに訪れました。そのイエスの、苦しい心の内を象徴するような沈んだ旋律(ト短調)です。

やがて〈イエス、十二弟子呼びて言いたもう〉と、当日の福音書聖句が、テノール独唱のアリオゾ(旋律的な語り)によって朗唱され、ただちにイエスの切実な想いをこめての言葉(バス独唱)：

見よ われら今 イエルサレムに赴かん  
人の子につきて記されたる すべてのことは  
かくて 果たさるべし

(ルカ 18、31、ルター訳聖書、大村恵美子訳詞)

にひきつがれて、あつと言う間に、われわれは物語の核心に引き込まれています。

これを受けての弟子たちの反応は、早めのテンポに転じて、ワサワサ・ギャギャといった印象の4声部合唱のフーガで表わされます：

弟子ら されど何をも知らず  
悟らざりき 主のみ言葉を (ルカ 18、34、同)

弟子たちの動揺の原因は、この間のテキストには採られなかったイエスの告白の内容(……異邦人に引き渡される、鞭打たれて殺される、三日目に復活する……)にあったことは明らかです。

このように、第1曲(アリオゾと合唱)の展開からしてかなり手の込んだ様相を見せたのは、この作品がトーマス・カントル採用試験の課題曲だった、という事情によるのでしょうか。37歳のバッハは、新しい任地への希望と自信にあふれて、その準備と創作に力を注いだのかもしれない。

因みに、上記の採用試験では、もう1曲、別のカンタータも披露されていて、本作の、とくに中間部の2)アリアー3)レチタティーヴォー4)アリアに見られる、どこか優美で軽やかな曲想にくらべ、後者、第23番《主なる神 ダビデの子》BWV 23の方は、同じ教会暦に作曲されたが、当日の聖句の別の箇所を焦点を当てて(盲人の「憐れみたまえ」の叫び、ルカ 18、35以下)、厳粛な響きのなかに終始します。この魅力的な作品の紹介も楽しみです。楽譜出版計画初年の12曲には選ばれていません。来年度にご期待ください。

横道にそれますが、しぶしぶの採用決定(ライブツィヒ市参事会は、当初テレマンの任用を望んだ)を経て、めでたくカントル職に就いたバッハは、驚異的なペースでカンタータ作品を生産し始めます。ご存じの、豊穡の「ライブツィヒ第1期」(1723年5月-29年)です。

とくに、その初年度後半の1724年2月から4月にかけて、今回の第22番と、前回とり上げた第12番の2曲は、間をおかず再演されています。もっとも第22番は、公式な礼拝での上演としては初演と言うべきでしょうか。また第12番の方は、もちろんライブツィヒ市民の前での上演は初めての機会でした。この際、ヴァイマル稿のへ短調は、第22番と同じト短調に移調されています。作曲者本人にとっても、トーマス教会の会衆にとっても、復活節を挟んでの短期間に、両作品が並んで、たしかに鳴り響いたことがあったのでした。

われわれの、同じステージでの再現にも、より深い興味を感じます。

【BWV 11 は次回の予定】

◆上演用歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。  
[http://bachchor-tokyo.jp/japanese\\_words/index.htm](http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm)



<連載随想> 退屈するのはいそがしい [21]

## 「ふるさと」って何？

安曇野閑人 大野 博人

多くの人に愛される唱歌『故郷（ふるさと）』にモヤモヤした感じを持っていた。安曇野に住んでなおさらそれが増した。

うさぎ追ひしかの山やま／こぶな釣りしかの川／夢は今もめぐりて……

今、どこで何をしている人の心情だろう。そんなに故郷が恋しいならさっさと帰ればいいのに。

先日、朝日新聞のオンライン・オピニオンサイト『論座』で地方移住についての対談が載っていた。その中で安曇野市の太田寛市長が、若者が故郷に帰ってこないのは、大正期にできたこの歌の存在も大きいんじゃないか、と語っている。「志を果たして、いつの日にか帰らん」と歌っている。長野県出身の高野辰之の詩です。前に知事会で鳥取県の知事が「ふるさとは志を果たして帰るところではなくて、これからは志を果たしにふるさとに帰る時代だ」と主張していました。あの歌の作曲家が鳥取の人なんですね。

田舎をたたえる歌で都会の人は感傷にひたるけれど、田舎に住む人はそれにイライラする。この気持ち、わかる。

そもそも「ふるさと」という言葉がノスタルジックな響きをまとうようになったのはいつからか。近代化し人口が都市に集中する前は、日本は定住型の社会だった。人々は農耕や漁業で暮らしを立て、たいてい生まれたところやその近辺で生涯を過ごしていただろう。出身地をなつかしむ境遇に身を置いた人はあまりいなかったはずだ。

しかし、近代化とともに都市に人口が集中する。多くの人にとって故郷を捨てるのは生きる糧をえるためだったとしても、時代にあおられた上昇志向に抗えず都会に出てくる人も少なくなかっただろう。ふるさとのことを思い出すと、ちょっと心が痛む。「でも、出世したら帰るからね」という空手形を叙情的な調べに乗せてみると、なにやら「しかたない、人生とはそういうもんなんだ」となぐさめられる。

結局、この歌は、地方より都会を選んだ人のいいわけソングに聞える。そのうえ、地方に留まったり都会から地方に移ったりすることに、敗北やあきらめというイメージがつきまとうようになってしまったとしたら、罪作りの歌だ。

この歌が発表されたのは1914年。その10年以上も前の1901年に刊行された本がすでに愛郷心のうさんくさを指摘している。当時のジャーナリスト、幸徳秋水の『二十世紀の怪物 帝国主義』。

成功して得意になっている人が〈故郷を思慕するは、その心ことさらに卑しむべきあり〉と一刀両断してい

る。〈彼らは即ち郷里の父老知人に向かってその得意を示さんと欲するのみ。郷里に対する同情惻隱にあらずして、一身の虚栄なり、虚誇なり、競争心なり〉。身も蓋もない。たしかに錦を飾りに帰郷するのは、自分のためであって、故郷のためではない。

どうやらこの唱歌が生まれる前から都市化への批判的視点はあり、出身地を去るのは心苦しい選択だった。それをこの歌がすくい取ったのだらう。歌は世につれ、世は歌につれ。

クラシック音楽の世界でも、「望郷」の思いを込めた曲が登場し、人気を博するようになるのは、都市化が加速する時代になってからかもしれない。若いころに母国ポーランドを離れて帰らなかったショパンのポロネーズはその例だろう。バッハはその前の時代の人。彼の曲に心を動かされても、それはノスタルジーとはちがう気がする。

さて、安曇野。ここは私の出身地ではない。故郷ではない。移住を考える前には訪れたこともなかった。移住は望郷の念とは関係ない。だいたい飾るべき錦など持ち合わせていないし、あっても幼いときからの知人もいないところで飾ってもむなし。

首都圏を離れるのに、敗北感もあきらめもなかった。むしろ、気分は高揚していた。知らないところで暮らすことへのわくわく感。なじみのなかった国や町への赴任が決まったときみたいに。

実際、生活はすっかり変わった。雑木林に囲まれた家に住み、自分の畑で野菜を作り、新しい友人が増えていく。退屈したくて、という不純な動機ではじめて移住だけれど、日々は新しい発見に満ちている。

地方移住者が徐々に増えているという。退屈したいのに退屈できない人の心を歌にしたら、けっこう受けるかも。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



■安曇野の代表的観光スポットの水車小屋。ノスタルジックだけれど、もともと黒澤明監督の「夢」（1990年公開）のセットとして建てられた。（写真・説明とも筆者）